

CONTENTS

現場に役立つ日本語教育研究 1 目次

まえがき 庵功雄 iii

- 第1章 日本語学的知見から見た初級シラバス(庵 功雄) 1
- 第2章 日本語学的知見から見た中上級シラバス(庵 功雄) 15
- 第3章 話し言葉コーパスから見た文法シラバス(山内博之) 47
- 第4章 書き言葉コーパスから見た文法シラバス(橋本直幸) 67
- 第5章 出現頻度から見た文法シラバス(岩田一成・小西 円) 87
- 第6章 生産性から見た文法シラバス(中俣尚己) 109
- 第7章 教師から見た文法シラバス(渡部倫子) 129
- 第8章 学習者から見た文法シラバス(劉 志偉) 147
- 第9章 初級総合教科書から見た文法シラバス(田中祐輔) 167
- 第10章 日本語能力試験から見た文法シラバス(森 篤嗣) 193
- 第11章 類義表現から見た文法シラバス(建石 始) 215
- 第12章 対照言語学的知見から見た文法シラバス(高 恩淑) 233

あとがき 山内博之 257

執筆者紹介 263

まえがき

庵 功雄

1. はじめに

本書は、「文法シラバス」というものをどのように考えるべきかについて、多角的に検討した論文集である。

本書の書名は『データに基づく文法シラバス』である。「文法シラバス」については本書の中でもいくつか定義が述べられているのでここでは割愛し、「データに基づく」という部分について、少し述べてみたい。

これまでの日本語教育にはいくつかの文法シラバスが存在するが、その多くは、当時の日本語教育関係者の経験値（「勘」）によって定められたものと言えよう。そのこと自体が問題であるわけではない。シラバスに問題点があるとしても、時代的な制約などを考えれば当然の部分も多い。問題なのは、既存のシラバスを「金科玉条」のように考え、その実質的な改訂を拒んできたこれまでの日本語教育の体制にある。

この点に関する詳しい議論は他所に譲るが（cf. 庵 2009b、2011b、2013、山内 2009 など）、いずれにせよ、現在の文法シラバスにはさまざまな問題点が存在し、一種の制度疲労を起こしているのは明らかである。今、必要なのは、具体的なデータや方法論にもとづいて、「文法シラバス」とはどのようなものであるべきかを問い直す作業である。本書の「データに基づく」という名称には、編者および各執筆者のこうした思いが込められている。

ここでは、本書への導入として各論文の「読みどころ」を解説し、「データに基づく」「文法シラバス」というツアーに読者を誘うことにしたい。

2. 本書の構成

本書には、以下の12本の論文が掲載されている。以下、この順に各論文について、簡単に解説していく。

- 第1章：日本語学的知見から見た初級シラバス（庵功雄）
- 第2章：日本語学的知見から見た中上級シラバス（庵功雄）
- 第3章：話し言葉コーパスから見た文法シラバス（山内博之）
- 第4章：書き言葉コーパスから見た文法シラバス（橋本直幸）
- 第5章：出現頻度から見た文法シラバス（岩田一成・小西円）
- 第6章：生産性から見た文法シラバス（中俣尚己）
- 第7章：教師から見た文法シラバス（渡部倫子）
- 第8章：学習者から見た文法シラバス（劉志偉）
- 第9章：初級総合教科書から見た文法シラバス（田中祐輔）
- 第10章：日本語能力試験から見た文法シラバス（森篤嗣）
- 第11章：類義表現から見た文法シラバス（建石始）
- 第12章：対照言語学的知見から見た文法シラバス（高恩淑）

3. 各章の紹介

第1章：日本語学的知見から見た初級シラバス（庵功雄）

この章と次の第2章では、日本語学的な知見を踏まえた観点から、旧日本語能力試験の出題基準に代表される現行の文法シラバスの全面的な見直しの必要性和、具体的なシラバスの案が提示されている。

第1章では、初級文法シラバスの見直しが主張されているが、その当初の理由は、「地域型日本語教育」における文法項目の大幅な刈り込みの必要性であった。そこには、「やさしい日本語」の考え方が大きく関わっている。

しかし、初級文法シラバスを新しいものにする必要性は、「学校型日本語教育」についても同様に存在することがこの章の中で述べられている。そし

て、そのことを踏まえて、新しい学校型のための初級文法シラバスが提案されている。

第2章：日本語学的知見から見た中上級シラバス（庵功雄）

第2章の課題は中上級の文法シラバスの見直しである。そもそも、小林(2009)が指摘するように、現行の文法シラバスでは、シンタクスに関わる狭義の文法は初級で終わらせ、中級以上では複合辞を中心とする機能語の学習が中心になっている。

しかし、こうした中上級の文法シラバスには、極めて重大な問題点がいくつか存在する。この論文では、産出を中心に議論を行い、言語技能との関連をもとに、複数のコーパスを参照して、新たに設けた Step3（初中級）～Step6（上級）の文法シラバスを策定した。

このシラバスは、「やさしい日本語」との関連で言えば、定住外国人の子どもたちや、ろうの子どもたちのための日本語教育（「バイパスとしての「やさしい日本語」」）にとって非常に重要なものである（cf. 庵 2014a、2014b）。

第3章：話し言葉コーパスから見た文法シラバス（山内博之）

この本が編まれることになったそもそものきっかけは、OPIのデータをもとに策定された山内(2009)の「初級」文法シラバスと、「やさしい日本語」の中の「ミニマムの文法」という観点から策定された庵(2009a)とがほとんど同様の内容であったということにある。

山内(2009)は帰納的な、庵(2009a)は演繹的な手法を用いたものであり、手法においても、目的においてもまったく異なるものである。また、相互にはまったくその存在を知らなかったにもかかわらず、両者で得られた結論はほとんど等しかった。そこには、偶然ではない何らかの意味があるはずだ、というのが本書の出発点になっている。

「あとがき」で山内氏が詳しく述べているように、山内(2009)と庵(2009a、2011a、2015)の Step1 の共通点は、「動詞の活用を必要としない」という点にある。

この論文で、山内氏はこの点についての考察を深めている。すなわち、

KY コーパスを用いて、OPI で初級～中級中期と判定された学習者が使用している動詞の活用を要する要素を考察し、学習者の使用実態をさらに精査するということである。その結果、動詞の活用を必要とする語の大部分はテ形であることがわかった。上位を占めるテ形は「住む、持つ、見る、食べる、話す」など(のテ形)であるが、ゼロから始まる初級では、これらのテ形を「かたまり」として導入しておけば、それ以外については、山内(2009)、庵(2009a、2011a)の結論は維持できることが明らかになった。

なお、この論文の最後には、「初級文法シラバス(庵・山内バージョン)」として、庵(2015)のStep1をもとに作成された初級文法シラバスの案が提示されている。

第4章：書き言葉コーパスから見た文法シラバス(橋本直幸)

この論文は、第3章の山内論文の方法論を基本的に踏襲して、書き言葉のコーパスであるYNUコーパス(横浜国立大学コーパス)から分析できる書き言葉の特質を述べたものである。

YNUコーパスは、横浜国立大学に在籍する留学生(中国語母語話者、韓国語母語話者)と日本人大学生各30名を対象として、それぞれの被調査者に、場面や相手の異なる12の作文タスクを課したもので、各作文を一定の基準で評価した後、その結果に基づいて、被験者を「上位群」、「中位群」、「下位群」(各3分の1ずつ)に分けている。

分析を通して、山内(2009)および第3章の山内論文の分析対象であり話し言葉のデータであるKYコーパスと、書き言葉のデータであるYNUコーパスとの性質の違いによる違いがいくつも明らかになっている(例えば、格助詞「へ」、「のではないか」、「たい」など)。また、タスクと文法形式の相関が見られることもわかった。

第5章：出現頻度から見た文法シラバス(岩田一成・小西円)

初級文法シラバスの代表として、旧日本語能力試験出題基準の3、4級項目があるが、その内容を網羅的に検証したものはこれまでない。この論文では、名大会話コーパスの分析を通して、コーパスにおける出現頻度を基準に

したときに、初級で取り上げるべき項目のリストが提出されている。

分析を通して、「てる／ちゃう／とく／みたい／って」のように、3、4級項目には含まれていないが、会話で頻出する形式がかなりあることや、1つの機能に多くの形式が対応している場合に、その形式を絞り込む必要があることなどがわかった。最後に、この論文とほぼ同規模の書き言葉コーパスを用いた研究である森(2011)との比較を通して、口語表現出現率(話し言葉で出現する割合)が提示されている。

第6章：生産性から見た文法シラバス(中俣尚己)

文法項目について見ていくと、いろいろな形式と共起するものがある一方で、特定のものと組み合わせしか思いつかないものがある。この論文は、「生産性」という概念をキーワードに、こうした日本語教師が感じる直感を定式化し、可視化したものである。

生産性が高い項目はいろいろな要素(この論文では動詞)と共起するものであり、生産性が低い項目は特定の要素としか共起しないものである。生産性が高い項目は時間を表すものに多いことがわかった。

生産性は難易度と関連が強い。生産性が高く出現頻度も高いものは、初級から練習する価値があり、かつ、練習すると使えるようになる割合も高い。一方、生産性が低いものは、共起する要素の種類が少ないので、語彙的に扱うべきである。そして、最も難易度が高いのは生産性が中程度で出現頻度が高いものである。

この論文の内容の一部は中俣(2014)にも活かされているが、「生産性」は、シラバスや教室活動をデザインする上で、今後重要な指標として用いられていくことになると思われる。

第7章：教師から見た文法シラバス(渡部倫子)

日本語教師の意識の中で文法シラバスはどのような形になっているのか。この論文はこの問題を取り扱っている。日本語教師80名と教師経験のない日本語母語話者(大学1年生)80名に、現行の初級教科書にとられている文法項目を提示し、その必要度を判定してもらうという形の調査を通して、日

本語教師と一般の日本語母語話者との主観判定の比較を行っている。

調査の結果、日本語教師と一般の日本語母語話者の主観判定には強い相関があることがわかった。その一方、「でもない」のように、両者の判定が大ききずれるものもあった。こうしたものについては、今後その扱いを注意する必要がある。

一方、それぞれのグループの判定（必要度）と『みんなの日本語』の提出順序（難易度）との関係を見ると、日本語教師による必要度と『みんなの日本語』による難易度との間には強い相関が見られたのに対し、一般の日本語母語話者による必要度と『みんなの日本語』による難易度との間にはそれほど強い相関は見られなかった。このことは、教師の主観判定に教科書の提出順序が強く影響を与えていることを示している。

第8章：学習者から見た文法シラバス（劉志偉）

この本の各章で扱われている文法シラバスは、第3章、第4章を除いて、原則として、日本語母語話者の観点から作られたものである。もちろん、各章において、学習者のデータは取り入れられているものの、学習者自身の意見を直接取り入れるということはない。

この章では、上級学習者であった筆者自身が折に触れて疑問に感じ、メモしてきた文法上の問題点をもとに、上級から超級（native-like）を目指す学習者にとって問題となる項目を取り上げたものである。

上級から超級に進むためのシラバスはほとんど存在しないのが現状であるが、この論文はこの分野の研究を大いに刺激する可能性を秘めている。

第9章：初級総合教科書から見た文法シラバス（田中祐輔）

第7章では、日本語教師が「初級」の文法項目と認識している項目が抽出された。これはいわば、「共時的な」分析である。これに対し、この論文では、戦後日本で出版された全ての日本語教科書を対象として、そこで共通に扱われてきた項目、時代によって取り上げられたり取り上げられなかったりした項目が抽出されている。これはいわば、「通時的な」分析である。

分析の結果、一貫して取り上げられている項目は教科書の中での提出順が

早いのに対し、出現頻度が低い項目は提出順もさまざまであることや、一貫して取り上げられている項目の提出順は年代を追うごとに安定してきていることなどがわかった。

日本語教育文法の方法論として、教科書分析の重要性はよく指摘されるが、この論文はその観点からも研究上の1つのモデルとなるものである。

第10章：日本語能力試験から見た文法シラバス（森篤嗣）

日本語能力試験は、日本語学習者の理解の実態が詰まったビッグデータである。この論文では、日本語能力試験の8年分の全データを対象に、正答率、識別力、選択率という3つの観点から、文法項目を分析している。

分析の結果、全体としては、設問の妥当性は高いものの、個別には、当該の級で問うには難しい文法項目も見られることが明らかになった。これは、初級に文法項目を詰め込んでいる現行シラバスの問題点をあぶり出す結果となっている。

日本語能力試験は、全世界の日本語教育のかなりの部分を規定している存在である。文法シラバスに関しても、日本語能力試験の与えている影響は極めて大きなものがある。それだけに、その結果はもっと広くさまざまな観点から分析されるべきである。この論文はそうした方向性を示すものでもある。

第11章：類義表現から見た文法シラバス（建石始）

文法項目の中には他の項目と類義関係になっているものがある。この論文は、そうした類義表現を、文法解説書、参考書、問題集における取り上げられ方というユニークな観点から分析している。

まず、何冊の本で取り上げられているかということから必要度を取り出し、次に、その項目の説明にどの程度の記述量（文字数）が費やされているかということから重要度を取り出している。その上で、必要度と重要度の組み合わせを通して、文法項目をシラバス化することを試みている。

ここで取り上げられている情報（必要度、重要度）は、第7章で見た日本語教師の主観的な項目の重みづけと通じるものがあるが、それと同じく、日

本語教師の「思い込み」に左右されている場合がありうることに注意する必要があるだろう。そうした限界を意識しながらであれば、これらのデータは文法シラバス構築にとって貴重な資源となると思われる。

第12章：対照言語学的知見から見た文法シラバス（高恩淑）

ある言語の話者が別の言語を学ぶとき、特に成人学習者の場合は、母語の転移 (transfer) が必然的に起こる。そのため、成人学習者に対する日本語教育では、この転移のうち、正の転移を積極的に利用し、負の転移をできるだけ抑制することができれば、学習効果は大きく高まる（庵 (2015 予定) はこうした「母語の違いに配慮した日本語教育」の重要性を指摘している）。

この論文では、こうした観点から、日本語と韓国語の文法項目の詳細な対照が行われている。

分析の結果、日本語と韓国語が1対1に対応しているものもあれば、その対応が多(韓)対1(日)であるものもあり、1(韓)対多(日)、多(韓)対多(日)になっているものもあることがわかった。韓国語母語話者にとっては、1対1、多(韓)対1(日)、1(韓)対多(日)、多(韓)対多(日)の順に難易度が高くなる（この場合の難易度は産出レベルのことである）。このうち、1対1のものは全体の約70%である。この70%をもって、韓国語母語話者にとって日本語は学びやすいとされていると思われるが、その一方で、最も難しい多対多の部分には、テンス、アスペクト、ボイスという日本語文の表現に直接関わる項目が集中している。このことは、論文の執筆やビジネス文書の作成といった、上級以上で高度な日本語運用能力を求められる韓国語話者にとっては、日本語はそれほどやさしい言語ではないことを示している。

引用文献

庵功雄 (2009a) 「地域日本語教育と日本語教育文法——「やさしい日本語」という観点から——」『人文・自然研究』3, pp. 126-141, 一橋大学.

庵功雄 (2009b) 「推量の「でしょう」に関する一考察——日本語教育文法の視点から——」『日本語教育』142, pp. 58-68.

- 庵功雄 (2011a) 「日本語教育文法からみた「やさしい日本語」の構想——初級シラバスの再検討——」『語学教育研究論叢』28, pp. 255–271, 大東文化大学.
- 庵功雄 (2011b) 「「100%を目指さない文法」の重要性」森篤嗣・庵功雄 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 pp. 79–100, ひつじ書房.
- 庵功雄 (2013) 『日本語教育、日本語学の「次の一手」』くろしお出版.
- 庵功雄 (2014a) 「「やさしい日本語」研究の現状と今後の課題」『一橋日本語教育研究』2, pp. 1–12.
- 庵功雄 (2014b) 「言語的マイノリティに対する言語上の保障と「やさしい日本語」——「多文化共生社会」の基礎として——」『ことばと文字』2, pp. 103–109.
- 庵功雄 (2015) 「日本語学的知見から見た初級シラバス」本書所収.
- 庵功雄 (2015 予定) 「中国語話者の母語の知識は日本語学習にどの程度役立つか——「的」を例に——」『漢日対比語言研究』6.
- 小林ミナ (2009) 「基本的な文法項目とは何か」小林ミナ・日比谷潤子 (編) 『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』 pp. 40–61, 凡人社.
- 中俣尚己 (2014) 『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版.
- 森篤嗣 (2011) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目の出現頻度」森篤嗣・庵功雄 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 pp. 57–78, ひつじ書房.
- 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房.

第 1 章

日本語学的知見から見た 初級シラバス

庵 功雄

1. はじめに

日本語学習者の多様化、日本語教育を取り巻く状況の変化などともない、現行の文法シラバスを作り直すことが喫緊の課題になっている。この論文と庵 (2015) では、こうした問題意識にもとづき、初級から上級までを見据えた新しい文法シラバスを提案する。このうち、この論文では、初級に関する問題を論じる。

以下、2. では、なぜ新しい文法シラバスが必要であるのかについて論じ、3. では、地域型日本語教育における問題点を、4. では、学校型日本語教育における問題点を、新しい文法シラバスと結びつけて論じる。

2. なぜ新しい文法シラバスが必要なのか

2.1 学習者の多様化—学校型日本語教育と地域型日本語教育—

最初に取り上げるのは、学校型日本語教育(学校型)と地域型日本語教育(地域型)である(cf. 尾崎 2004)。

両者はいくつかの点で異なるが、筆者なりに違いをまとめると次の表1のようになる。ここで注意すべきは、学校型の方法論(典型的には文型積み上げ式)を地域型に持ち込むことの問題点は、時間的な問題(初級を終えるのに3年かかる)だけではないということである。より重要なのは、ビザの

第2章

日本語学的知見から見た 中上級シラバス

庵 功雄

1. はじめに

日本語教育を取り巻く状況の変化に対応するためには、初級だけではなく、中上級もあわせた形で文法シラバスを作り直す必要がある。この論文では、そうした立場から、新しい中上級文法シラバスに必要なことを考え、新しいシラバスを具体的に作っていく。

2. 日本語教育を取り巻く状況の変化と中上級シラバス

庵(2015)(以下、「前稿」と呼ぶ)では主に「居場所作りのための「やさしい日本語」」という観点から初級文法シラバスを作り直す必要があることを論じたが、ここでは、それ以外の観点から(中上級)文法シラバスを作り直す必要について論じる。

2.1 バイパスとしての「やさしい日本語」

最初に取り上げるのは、JSL (Japanese as a second language) の児童・生徒、および、ろう児に対する日本語教育という観点である。

まず、JSL の児童・生徒に関する日本語教育という点から考える。この子どもたちは、親が日本で働くこと、定住することを決めたことにより、日本で生活することを余儀なくされた形になっている。そうである以上、日本が

第3章

話し言葉コーパスから見た 文法シラバス

山内博之

1. はじめに

筆者がこの論文を執筆した動機は、初級文法項目に関し、山内(2009)と庵(2009, 2011)に大きな共通点が見られたということにある。山内(2009)は、学習者の文法形態素の使用状況から初級文法項目を探り出したものである。山内(2009)の初級文法項目は、表1のとおりである。

表1 山内(2009)の初級文法項目

品詞	項目
格助詞	が、を、に、と、から、より、で、の、について
とりたて助詞	は、も、ぐらい、だけ
並立助詞	とか、と
助動詞	です、た、ます、(ませ)ん、ない、たい、ようだ
補助動詞	ている
終助詞	か、ね
接続助詞	て、けど、たら、たり、とき、ため
接続詞	でも、じゃ(あ)、それから、 <u>で</u> 、 <u>だから</u> 、 <u>たとえば</u>
フィラー	あの一、えーと、えー

第4章

書き言葉コーパスから見た 文法シラバス

橋本直幸

1. はじめに

この論文では、日本語学習者による書き言葉のデータを資料として、それぞれの形態素や表現の出現頻度をもとに、学習者に指導すべき項目について検討を行う。学習者コーパスをもとにシラバスの再考を試みたものとして山内(2009)がある。山内(2009)は、話し言葉を考察対象とし、OPIの文字化資料であるKYコーパスをレベルごとに形態素解析した後、それぞれのレベルにおける機能語の出現頻度から、初級シラバスを再考したものである。この論文では、山内(2009)に倣い、対象を書き言葉に変え、同様の手法でシラバスを検討する。まず**2.**で分析対象とする日本語学習者の書き言葉コーパスについて説明する。次に**3.**で分析の方法について説明する。そして、**4.**でそれぞれの形態素や表現の出現頻度をもとに、分析を行う。**5.**では、各タスクごとの特徴について述べる。最後に**6.**で結論を述べる。

2. データについて

学習者コーパスをもとにシラバスを検討する場合、そのコーパスが学習者の能力別、またはレベル別に構成されていることが前提となる。日本語教育においても、近年、学習者の書き言葉コーパスが次々と構築、公開されるようになってきているが、この論文では、金澤(編)(2014)で公開された

第5章

出現頻度から見た 文法シラバス

岩田一成・小西 円

1. はじめに

1.1 シラバスを議論する必要性

野田(編)(2005)が出版されてから、日本語教育文法という分野では文法シラバスを再検討すべきであるという提案が広がりを見せている(森・庵(編)2011、野田(編)2012など)。初級文法(この論文では国際交流基金・日本国際教育支援協会2002が定める4級を含む3級文法のことをこう呼ぶ)は指導項目が非常に多く、それらの取捨選択を考える時期にきていると言える。また岩田(2014)では、主要教材におけるその教育目標(話し言葉の習得を目指す/4技能の基礎を学ぶなど)と採択文法形式の関係を分析し、「教育目標は各教材が別々に設定しているが、採択文法はどれも変わらない」という指摘をしている。つまり、教育目標が話し言葉がその他に関わらず文法シラバスはどれも変わらないのが現状である。

日本語教育文法の先行研究は、個別の文法形式をテーマにしていることが多い。しかし、現場の日本語教師の方に研究成果を届けるには、ここで一度網羅的・体系的に文法シラバスを見直す必要があると考えている。具体的には、各文法形式の出現頻度を出して比較をしてみる。こういったデータの積み重ねが、初級として指導すべき文法、指導項目から削除してもかまわない文法の仕分け作業に貢献すると考えている。

第6章

生産性から見た 文法シラバス

中俣尚己

1. はじめに

近年、コーパスを使った研究が広く行われ、その中には前接動詞に注目したものもある(清水 2009、田 2013)。そして文法項目の中には、前接動詞に著しい偏りを見せるものが存在する。例えば「てある」は話し言葉では「書いてある」だけで5割近い割合を占め、「置いてある」がさらに1割を占めることがわかっている(中俣 2011)。

このような偏りは教育において重要な意味を持つ。つまり、初級で「てある」の授業を行う時は、「書いてある」「置いてある」を重点的に教えるべきで、「開けてある」「冷やしてある」のように様々な動詞を使ってドリル練習をしても効果は薄いということになる。他方、「ている」などは色々な動詞と接続するため、ドリル練習は効果があると言えるだろう。

そうすると、次のような疑問が浮かび上がる。どの項目がドリル練習をしたほうがよい項目で、どの項目がしなくてもよい項目なのか。この疑問を明らかにするためには、「どれだけの種類の動詞と結びつくか」という度合いを数値化して比較する必要がある。

この論文ではこの「どれだけの種類の動詞と結びつくか」という度合いを「生産性」(productivity)と呼び、初級文法項目を対象にその数値化を行う。さらに、生産性が学習難易度と関係していることを示し、それを元に初級シ

第7章

教師から見た 文法シラバス

渡部倫子

1. はじめに

2001年以降、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) によって示された行動中心主義的な言語熟達度の枠組みは、言語教師の文法観に大きなインパクトを与えた。日本語教師の文法観は、かつての文法シラバス重視から場面・機能シラバス重視へ、そしてコミュニケーション言語活動を支える文法シラバスへと変容しつつある。

Richards & Reppen (2014) は第二言語習得研究の知見から、文法をテキスト産出(話す・書く)のリソースとしてとらえ、その教授原理を提唱している。12の教授原理のなかには、今現在教えている学習者が必要としている文法資源を特定すること、コーパスを活用すること、等があげられている。こうした文法の新しい教授原理を教育実践に結びつけるために、この論文では日本語教師の直観、つまり主観的な判定を元に、学習者が必要としている文法資源(教師からみた文法シラバス)を特定することを目的とする。コーパス分析による日本語母語話者の使用頻度だけでなく、日本語教師を含む日本語母語話者の直観をベースライン・データとして提示することで、文法シラバスの多角的な再構築に貢献できると考える。

以下、2.では日本語教師の主観判定を扱った先行研究を概観する。3.で日本語教師を含む日本語母語話者を対象とした調査の概要を述べ、4.で調

第8章

学習者から見た 文法シラバス

劉 志偉

1. はじめに

日本語教育において、コーパス等の客観的データに基づいて、個々の表現を選定しその配列順を決めるという試みは、日本語教師の現場経験と主観的判断とによって作られた現行の日本語教育文法に比べて科学的である。だが、客観的なデータを絶対視することなく、それ以外の観点を整合的に考え合わせることも重要である。この論文では、学習者側の視点から文法シラバスについて考える。

以下、**2.**では、新しい日本語教育文法を構築するにあたって、ネイティブ教師と学習者（学習経験者）との役割分担について述べる。**3.**では、学習者の視点について言及した上で、具体的な研究内容と手法について説明を行う。そして**4.**では、学習者を対象に行ったアンケート調査の結果を分析し、文法シラバスにおける学習者が気になる学習ポイントを明らかにしたい。

2. ネイティブ教師と学習者（学習経験者）との役割分担

新しい日本語教育文法を構築するに際して、教師と学習者という単純な対極関係からのみそれぞれの役割を考えるのでは不十分である。ネイティブ教師と日本語を母語としないノンネイティブ教師を一括して日本語教師として扱う場合も多いが、この論文ではノンネイティブ教師も日本語学習者である

第9章

初級総合教科書から見た 文法シラバス

田中祐輔

1. はじめに

この論文は、既存教科書の側面から文法シラバスについて考察するものである。現在、「複数の異なるアプローチによってシラバスを作成し、それらの一致度を見る」(山内 2014: 197) 取り組みが、山内 (2009) や庵 (2011) を始め、様々な切り口から進められているが、この論文は、こうした今後の在り方についての議論に必要な、過去から現在までの文法シラバスの歩みに関する基礎的資料を提示するためのものである。

2. 問題の所在

2.1 日本語教科書調査の有効性

「シラバス」の定義は様々であるが、「教育方法、あるいはクラスの教育・習得内容(たとえば、文法構造、文パターン、機能、トピックなど)とその構成を示したもの」(日本語教育学会(編) 2005: 754)とした場合、日本語教育で用いられる「教科書」は、見方を変えればシラバスそのものと言っても過言ではない。なぜなら、『教科書』は、あるコースを想定し、その対象者、目的、学習時間などを考慮して、学習内容を効果的に学べるように配列したもの」(吉岡 2008: 3)であり、その特性がシラバスと重なるからである。このため、この論文が目標とする今後の文法シラバスの考察に際して必要と

第 10 章

日本語能力試験から見た 文法シラバス

森 篤嗣

1. はじめに

日本語能力試験は、現在の日本語教育ならびに日本語教科書に強い影響を与えている。また、学習者の学習動機としても「日本語を勉強するからには日本語能力試験を目指す」という目標になることが多く、文法でも語彙でもその影響は計り知れない。

一方で、日本語能力試験は大規模試験であるからこそ、日本語学習者の理解の実態に即した客観的なデータとしての活用の可能性がある。この論文では、文法シラバス構築のための文法項目の難易度を探るために、日本語能力試験の結果を記した『分析評価に関する報告書』の調査と分析をおこなう。

2. 『分析評価に関する報告書』について

日本語能力試験は、平成 22 年 (2010 年) から新試験を実施している。新試験実施に伴い、項目プール方式が導入され、過去問の発売がなくなった。それに伴い、『分析評価に関する報告書』も発行されなくなった。

一方、旧試験の『分析評価に関する報告書』は、1984 年度の第 1 回試験から内部資料として作成されはじめ、1990 年度から非売品として、2002 年度からは市販もされており、27 年分という膨大な資料が残っている。1984 年度当初は 7,019 人と一万人に満たなかった受験者も、2000 年度には 20 万

第 11 章

類義表現から見た 文法シラバス

建石 始

1. はじめに

この論文では、まず、類義表現を扱った文法解説書、参考書、教師用指導書などをもとに、初級の文法項目に関する類義表現の実態を示す。具体的には、文法解説書、参考書、教師用指導書、(日本語能力試験の)問題集などを使い、類義表現の説明に費やされた説明量(文字数)を数えることによって、類義表現の実態を示す。また、当該の類義表現が掲載された書籍数、説明に費やされた説明量という2つの観点からの分析をもとに、初級の文法シラバスを提案する。

2. 類義表現に関する先行研究

類義表現に関する先行研究は多数存在する。例えば、宮島・仁田(編)(1995a、1995b)は現代日本語の類義表現について、項目別、表現別にその違いを考察している。また、類義表現に関する従来の先行研究は、そのほとんどが類義表現の意味や機能の違いを明らかにすることを目的としており、森田(2006)や泉原(2007)といった辞典が刊行されているほどである。その中で、山内(2013)は日本語教師の能力を高めるための類似表現研究を提案したものであり、異色の存在である。

類義表現の中には、多くの書籍、論文などで頻繁に取り上げられるものも

第 12 章

対照言語学的知見から見た 文法シラバス

高 恩淑

1. はじめに

本研究の最終的な目標は、対照言語学の知見を日本語教育に取り入れ学習者の母語に合わせたシラバスデザインや指導法、教材作りなどに役立てることである。その試みの一つとしてこの論文では、日本語と韓国語の初級文法項目を比較対照し、その類似と相違を明らかにすると共に、その結果を活かした日本語教育に役立つ新たな初級文法シラバスへの可能性を示唆したい。

2. 研究目的と位置づけ

近年、初級における文法シラバスの見直しの議論が広がっている中、一律の文法ではなく学習者のニーズに合わせた文法指導が必要とされている。

熊谷 (2002: 21) は、対照研究の成果を言語教育に取り入れることの重要性を唱えて、「外国語教育において、教授者が学習者の母語と目標言語の異同に関する情報をもっていることは、母語の干渉や習得上の困難点を予測し、指導方法や教材を準備する上で非常に有効である」と説明している。また、井上 (2005: 83) は、学習者の母語を考慮した日本語教育文法の必要性を述べていて、「少ない労力で大きな成果が得られる文法を教えるためには、学習者の母語を基準として日本語の文法を考える必要がある」としている。井上 (2005) の主張の通り、独習用教材や同じ母語の学習者が集まっている